

海 峡 て

海は生物に違ひない。物狂ほしい日の光に蒼白く揺れて閃めくのはあれは濡れた背の鱗であらう。

月光に濡れる女の露肌には人魚の幻想がまつはる。海藻の様に。

白い波は一しきり空しい情熱のしぶきをあげて音もなく消えた。すると後には黒い海が一面に擴がつた。又新しい沈が起つて消えた。

船は何時迄も白い尾鰭をはなさない。

——之は風景である。然し又何と似かよつた風景だらう。之は同時に追憶を航する

私の姿である。——